

月の増資は、8社42億円と、前月集中の反動もあって、低水準にとどまった。11月は、31社222億円と、金融繁忙期の12月を避ける企業が多いこともあって、やや増加する見込みである。しかし、12月には再びその反動もあって6社24億円ときわめて低水準に落ち込む予定で、ならしてみると、一般事業会社の増資意欲は、総じて引き続き低調とみられる。

一方、10月の起債(純増ベース)は、一般事業債が久々に大幅な増加を示した反面、電力債と金融債は多少減少し、地方債、政保債はほぼ横ばいとなった。一般事業債の増加は、一部B格債の格上げ問題が結局見送りとなったことから、これまで格上げを期待して起債を見合わせてきた企業が、改めて起債に踏み切ったことが主因である。反面、電力債の起債減少は、9社間のローテーションの関係で、当月たまたま起債銘柄が少ないためであり、また金融債は、当月からの発行条件改定が影響して、起債が減少したものである。この間、長期国債は、資金需給が季節的に引きゆるみを続けることを考慮のうえ、800億円が発行された。

これらの消化状況をみると、一般事業債が、大幅な起債増加にもかかわらず引き続き応募超過ぎみとなったほか、電力債もおおむね順調に消化さ

れたが、地方債の消化の足取りはこれまでに比べて鈍く、一部相互・信金等の買入れ減少を、関係都銀と米代金の流入した県信連の買入れ増加で埋める形となった。一方、長期国債の証券会社扱い一般募集分は、当月も順調に消化された。

起 債 状 況

(単位・億円、カッコ内純増ベース)

	9月	10月	前月比	11月	前年
				(見込み)	11月
合 計	657 (394)	740 (479)	83 (85)	881 (617)	811 (643)
事 業 債	248 (70)	328 (143)	80 (73)	419 (243)	393 (274)
	一般 (△ 30)	199 (86)	108 (116)	260 (141)	255 (182)
	電力 (157 100)	129 (57)	△ 28 (△ 43)	159 (102)	138 (92)
地 方 債	61 (42)	62 (40)	1 (△ 2)	62 (38)	58 (38)
政 保 債	348 (283)	350 (295)	2 (12)	400 (336)	360 (331)
金 融 債	1,530 (619)	1,320 (428)	△ 210 (△ 191)	1,437 (516)	1,232 (462)
	利付 (795 486)	584 (307)	△ 211 (△ 179)	658 (372)	597 (348)
	割引 (735 133)	736 (121)	1 (△ 12)	779 (144)	635 (114)
新 規 長 期 国 債	1,200	800	△ 400	1,300	—
証券会社 引受分	70	73	3	74	—

増 資 状 況

	市場第1部 上場会社		市場第2部 上場会社		合 計	
	社	億円	社	億円	社	億円
40年 10~12月	24	447	19	67	43	514
41年 1~3月	14	388	24	79	38	467
4~6月	18	415	18	31	36	445
7~9月	53	686	26	46	79	732
41年9月	36	302	14	26	50	328
10〃	3	34	5	8	8	42
*11〃	15	191	16	31	31	222
*12〃	1	7	5	17	6	24
*42年1月	0	0	4	6	4	6
*2〃	4	198	9	47	13	244
*3〃	6	69	6	11	12	80

(注) *印は見込み。

実 体 経 済 の 動 向

◇生産は大勢としてほぼ出荷増に見合って増加、製品在庫率は引き続き低下

生産は7~9月に前期比+5.7%と大幅増加を示したあと、10月(速報)も+0.7%とこれまでのテンポに比べるとやや伸び悩んだが、依然根強い上昇を続けている。この結果、年初来10月までの増加率(10月の昨年12月に対する増加率)はすでに

+16.1%に達した。ただ、こうした生産の増加も現在までのところは需要の増加(年初来10月までの出荷の増加率+16.0%)にはほぼ見合った動きを示しており、生産の伸びが出荷の伸びを著しく上回った前回景気回復期(38年10月の37年12月に対する生産の増加率+19.5%、同出荷の増加率+14.6%)とはかなり様相を異にしている。これは、需要がかなりのテンポで拡大を続けていることによるところが大きい。このほか、メーカーが総じて、需要に見合って生産をふやしていくという手堅い生産態度を維持していることも影響しているように思われる。

一方、最近の需要動向をみると、まず輸出は、内需の盛り上がりの影響を受け、鉄鋼、合板等の一部では輸出意欲がいくぶん減退していることもあって、全体として増勢鈍化傾向を示している。

また、官公需も、公共事業関係費の支払が7～9月に引き続き10月も低水準に推移している(季節変動調整済み計数でみて7～9月は前期比-24.9%、10月は前月比-9.9%)ことなどからみて、需要面に与える影響は多少とも後退し始めているようにうかがわれる。

このように、これまで需要拡大の基軸となっていた輸出や財政支出の伸びがこのところやや鈍化ぎみとなっているにもかかわらず、総需要がかなりのテンポで増加を続けている背景には、総需要のうち大きなウェイトを占める消費需要が総じて堅調に推移していることや、民間設備投資が漸次上向きつつあることが影響しているように思われる。すなわち、まず、消費需要についてみると、ベース・アップや時間外収入増などによる可処分所得の増加を背景に、引き続き順調に増加しており、現に、百貨店売上げ高や全都市家計消費支出の動きをみても、まずは順調な伸びをみせている。

次に、民間投資活動のうち、在庫投資についてみると、現在の在庫率を維持する程度か、またはさらに低目に押えたいとする向きが多く、メーカーの仕掛品在庫が生産の増加に伴って増勢を示し

ているほかは、メーカーの製品在庫や原材料在庫ならびに流通在庫はこのところ微増ないし横ばい程度となっている。このような状況からみて、企業の在庫投資は全体として比較的ゆるやかな増加にとどまっているようにうかがわれる。

一方、設備投資は、一般資本財出荷が、電力向け大型機械の著増によるとはいえ、9月、10月の両月にわたりかなり増加しており、中でも工作機械や汎用モーターの出荷が前年同期を大幅に上回る高水準(8～10月の対前年増加率、工作機械+42%、汎用モーター+21%)を続けていることなどから、次第に上向きの傾向を強めてきているものとみられ、11月調査の本行「主要企業短期経済観測」「中小企業短期経済観測」、企画庁の機械受注の見通し調査の結果からも、こうした傾向がうかがわれる。

(生産—引き続き増加)

9月の鉱工業生産(季節変動調整済み)は、前月比+2.2%と大幅に増加した。これを業種別にみると、繊維、窯業、化学など一部業種では、減産となったものの、その他は軒並み増加し、特に機械は一般機械(前月比+10.3%)や輸送機械(同+4.6%)の著増を主因に大幅増加を示した。特殊分

鉱工業生産の動向

(季節変動調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減率・%)

	40年		41年		41年		
	10～12月	1～3月	4～6月	7～9月	8月	9月	10月
鉱工業	175.2	181.7	189.3	200.0	199.4	203.7	205.2
指数							
前期(月)比	0	3.7	4.2	5.7	1.2	2.2	0.7
前年同期(月)比	1.5	4.2	9.1	14.3	15.4	14.6	18.3
投資財	-1.3	2.9	3.2	5.8	-1.2	3.2	2.4
資本財	-2.2	3.4	2.5	6.3	-2.0	3.7	2.8
同(輸送機械を除く)	-3.5	3.9	5.4	2.9	-3.7	4.3	3.3
輸送機械	-1.9	3.0	1.1	12.1	0.9	4.9	-0.4
建設資材	1.2	0.8	4.4	5.7	0.2	3.3	0.4
消費財	2.9	4.1	1.3	3.4	2.5	1.0	-0.6
耐久消費財	0.2	8.2	2.7	7.5	2.0	2.9	-2.1
非耐久消費財	4.4	1.0	1.6	1.5	2.5	0.6	0.6
生産財	0.3	4.8	5.5	5.7	2.0	1.2	0.4

(注) 通産省調べ、10月は速報。
前年同期(月)比は原指数による。

類別にみると、一般資本財はボイラーおよび原動機、金属加工機械、運搬機械などの著増から、また、資本財輸送機械は鉄道車両の急増や四輪車の着実な増加から、それぞれ著増を示した。このほか、建設資材は鉄構物の著増から、また耐久消費財は民生用電機の根強い増加からいずれもかなり増加した。この間、生産財も鉄鋼や、石油の生産調整撤廃などを映じ、7ヵ月にわたって着実な増加を続けているが、これが鉱工業生産中に占めるウェイトが高いだけに、最近の急テンポの生産上昇をささえる大きな要因となっている。

なお、10月の生産(速報、季節変動調整済み)は、前月比+0.7%とこれまでのペース(7月+2.3%、8月+1.2%、9月+2.2%)に比べやや伸び悩んだが、引き続き増加した。これを特殊分類別にみると、耐久消費財は前月まで増加を続けた家庭用電機(扇風機、洗たく機)およびカメラなどの減少から落込みをみせ、また資本財輸送機械も乗用車、トラックの減産を主因に微減したほかは、いずれも増加し、特に、発送配電機器の大幅増加を映じて一般資本財の著増が目立った。

(出荷——増勢回復)

9月の鉱工業出荷(季節変動調整済み)は、前月比+1.8%と、前2ヵ月の動き(7月+0.6%、8月+0.7%)に比べ増勢をかなり回復した。業種別にみると、電気機械が発送配電機器など大型機種種の著減を主因に減少したほか、窯業、紙・パルプ、繊維なども減少をみたが、反面、輸送機械は鋼船、鉄道車両の集中出荷などにより、また、一般機械はボイラーおよび原動機、繊維機械、運搬機械の出荷増から、それぞれ著伸を示した。これを特殊分類別にみると、資本財輸送機械は前述の鋼船、鉄道車両の著伸のほか、乗用車の着実な増加にさきえられて大幅に増加し、また、生産の場合とほぼ同様に、建設資材は鉄構物の著増から、耐久消費財は民生用電機、マシンなどの増加から、それぞれかなりの伸びとなった。この間、非耐久消費財のみは、前月著増した紙、繊維製品などの反動減が響いて微減となった。

鉱工業出荷の動向

(季節変動調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減率・%)

	40年 10~ 12月	41年			41年			
		1~ 3月	4~ 6月	7~ 9月	8月	9月	10月	
鉱工業		172.6	179.3	187.8	192.6	191.9	195.4	200.0
指数								
前期(月)比	0.6	3.9	4.8	2.6	0.7	1.8	2.4	
前年同期(月)比	3.7	2.7	11.7	12.3	11.4	12.4	15.4	
投資財	-1.2	5.9	3.6	-0.6	-1.8	4.7	4.4	
資本財	-2.1	7.6	3.3	-2.0	-1.9	5.7	5.7	
同(輸送機械を除く)	-0.3	2.1	6.1	1.3	-3.3	1.7	4.5	
輸送機械	-6.2	14.8	0.3	-3.8	1.1	9.4	3.2	
建設資材	1.2	1.4	3.9	3.8	-0.6	2.3	0.9	
消費財	2.3	1.4	4.2	2.0	1.2	-0.1	1.3	
耐久消費財	-2.3	0.4	11.8	6.1	-3.1	2.9	1.2	
非耐久消費財	3.6	2.4	1.9	0.8	2.0	-0.1	0.8	
生産財	0.6	4.3	6.2	4.8	1.6	0.8	1.4	

(注) 通産省調べ、10月は速報。
前年同期(月)比は原指数による。

なお、10月の出荷(速報、季節変動調整済み)は、前月比+2.4%と前月(+1.8%)に引き続き大幅な増加を示した。これを特殊分類別にみると、各財とも軒並み増加したが、特に発送配電機器の急増(+65.8%、非標準変圧器が中心)から一般資本財が大幅に増加し、また、資本財輸送機械も三輪トラックの著増を映じてかなり増加したのが目立った。

(在庫——製品在庫率は引き続き低下、原材料在庫は消費の増大から減少)

鉱工業製品在庫(季節変動調整済み)は、8月には5ヵ月ぶりに増加に転じたのに続き、9月も前月比+1.8%とかなりの増加となった。これを業種別にみると、鉄鋼が出荷の好調を映じて6ヵ月連続して減少した反面、輸送機械が前月比+16.2%と著増したのが目立っている。これは、主として乗用車、トラック、自動二輪車などの著増によるもので、今秋の新車発売に備えてメーカーが工場在庫を手厚くしたことが少なからず響いているものとみられる。特殊分類別では、資本財輸送機械の著増のほか、ボイラーおよび原動機、農業用機械の著増を映じた一般資本財の大幅増加などが目立っている。

上記のような出荷、在庫の動きを映じて、9月の鉄工業製品在庫率は115.0(前月比-0.1%)と微落した。最近における在庫率指数の動き(出荷の不規則なフレを3ヵ月移動平均でならしたうえ、在庫率指数を算出)を業種別にみると、鉄鋼、石油、繊維、紙・パルプ、電気機械などは引き続き低下している反面、非鉄、窯業などは上昇を示している。また、特殊分類別にみると、耐久消費財が目立って低下し、また、生産財も低下したが、輸送機械、非耐久消費財は上昇を示した。

なお、10月の製品在庫(速報、季節変動調整済み)は前月比-1.0%と減少を示した。これを特殊分類別にみると、一般資本財および非耐久消費財が増加したほかはいずれも減少した。特に、資本財輸送機械はトラック、バスの著減から大幅に減少し、耐久消費財も家庭用電機(テレビ)、精密機械(カメラ)の減少を中心にかなりの減少となった。また、上記のような出荷、在庫の動きを映じて、製品在庫率は前月比-3.2%と大幅に低下し(在庫率指数111.3)、36年10月以来の最低水準となった。

9月のメーカー原材料在庫(季節変動調整済み、

鉄工業製品在庫の動向

(季節変動調整済み、特殊分類別は前期(月)末比増減率・%)

	40年		41年			41年		
	12月	3月	6月	9月	8月	9月	10月	
鉄工業								
指数	225.8	228.9	221.4	224.8	220.9	224.8	222.6	
前期(月)比	-2.4	1.4	-3.3	1.5	0.4	1.8	-1.0	
前年同期(月)比	5.8	5.2	-0.5	-2.9	-2.3	-2.9	-1.0	
製品在庫率指数	131.0	127.7	116.7	115.0	115.1	115.0	111.3	
投資財	-5.0	-3.8	-4.5	7.3	0	4.9	-0.9	
資本財	-7.1	-3.2	-5.0	9.2	0	6.5	-1.5	
同(輸送機械を除く)	-10.0	-0.1	-7.4	3.7	-1.1	4.1	0.6	
輸送機械	5.0	-12.9	-1.9	29.3	0.8	18.6	-6.8	
建設資材	-0.9	-5.2	-3.0	3.6	-0.4	1.9	-0.2	
消費財	-4.7	4.5	-4.7	0.2	0.7	1.4	-0.5	
耐久消費財	-8.9	12.6	-9.8	-3.4	-1.7	3.5	-3.1	
非耐久消費財	0.2	-2.7	-3.1	2.3	1.3	1.4	1.5	
生産財	-0.7	3.3	-1.2	-0.1	0.3	0.5	-1.6	

(注) 通産省調べ、10月は速報。
前年同期(月)末比は原指数による。

速報)は、前月比-1.1%と久方ぶりに減少した。業種別にみると、機械(鋼船、鉄道車両を除く)、紡績、紙・パルプなど一部業種で増加をみたものの、その他業種では軒並み減少している。特殊分類別にみても、素原材料がかなり大幅な減少となったほか、製品原材料も微減を示した。素原材料の減少は、年初来かなりの積み増しが行なわれてきた輸入素原材料が、当月は鉄鉱石、銅鉱石、コークス用原料炭、生ゴムなどを中心に8ヵ月ぶりに大幅減少を示したことによる。また、製品原材料の減少は大宗を占める国産製品原材料が織物業の糸、化合織メーカーの石油化学製品などを中心に微減したためである。一方、国産素原材料はすでに3ヵ月にわたり連続して減少したあとだけに、当月はパルプ用材、紡績原料などを中心に在庫補充の動きもみられ、若干増加した。

原材料在庫の動きを3ヵ月移動平均によつてならしてみると、6月+1.1%、7月+0.8%、8月+0.2%とこのところやや増勢鈍化きみとなっているが、これは、生産の拡大に伴い、原材料消費がかなりのテンポで伸長し、これに対して在庫手当てが遅れきみとなっていることによる面が大きいとみられる。

すなわち、原材料消費(季節変動調整済み)は、

製造工業原材料在庫および在庫率の推移

(季節変動調整済み)

	41年			41年		
	3月	6月	9月	7月	8月	9月
在庫指数	127.7	130.5	131.2	132.7	132.7	131.2
前期(月)末比	3.0	2.2	0.5	1.7	0	-1.1
素原材料	2.6	6.3	-2.1	0	0	-2.1
うち輸入分	0.6	8.8	-0.1	1.8	1.4	-3.2
製品原材料	3.3	0.6	2.9	3.1	0	-0.2
うち国産分	3.3	0.3	2.7	2.9	-0.1	-0.2
在庫率指数	74.5	73.2	69.2	72.4	70.4	69.2
素原材料	72.6	72.9	68.2	72.9	70.6	68.2
うち輸入分	69.6	71.2	68.0	72.4	71.1	68.0
製品原材料	79.2	76.6	73.1	76.3	74.5	73.1
うち国産分	78.9	76.2	72.5	75.8	73.9	72.5

(注) 通産省調べ、9月は暫定。
前期(月)末比増減率(%)。

7月、8月と著増のあと、9月(速報)も前月比+0.6%と引き続き増加した(3か月移動平均によってならしてみると6月+1.6%、7月+2.2%、8月+2.1%)。9月の動きを業種別にみると非鉄、機械、紙・パルプ、紡績などでは微減となったが、鉄鋼、窯業、石油、化学繊維などはかなりの伸びを示した。

以上のような原材料在庫、消費の動きを映じて在庫率は前月比-1.7%(在庫率指数69.2)と引き続き大幅に低下した。

次に、8月の販売業者在庫(季節変動調整済み、速報)は前月比-1.9%とかなり減少した。主要商品別にみると、鋼材がユーザーの買進みを主因に引き続き著減したほか、非鉄金属(故銅、鉛)、繊維原料(綿花、羊毛等)、織物、生ゴムなどかなりの減少をみた。最近の動きを3か月移動平均によってならしてみると、5月-1.5%、6月+0.1%、7月-0.7%と月により多少のフレはみられるものの大勢横ばいを続けている。

販売業者在庫の推移

(季節変動調整済み)

	40年		41年		41年		
	12月	3月	6月	6月	7月	8月	
総合指数	196.3	205.9	197.1	197.1	199.6	195.8	
前期(月)末比	1.0	4.9	4.3	-1.5	1.3	-1.9	
素原材料	-13.7	1.2	5.9	-4.2	-8.2	4.2	
製品	1.7	6.0	5.0	-1.4	3.1	-3.3	

(注) 通産省調べ、前期(月)末比増減率(%)。

(設備投資—機械受注は上向き傾向)

設備投資の先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節変動調整済み)をみると、8月に前月比+16.4%と著増のあと、9月は-9.1%と減少した。しかし、これを四半期でくくってみると、1~3月+2.7%、4~6月+0.1%、7~9月+11.6%と増加傾向をたどっており、また、月々のフレの大きい電力、海運を除く民需の動きをみても、4~6月+2.2%、7~9月+6.7%とこのところやや増勢を強めている。

需要先別機械受注の推移

(季節変動調整済み、月平均、単位・億円)

	41年			41年		
	1~3月	4~6月	7~9月	8月	9月	10月
民需	763	718	845	825	896	679
	(5.3)	(- 6.0)	(17.7)	(1.4)	(8.6)	(-24.3)
同(除海運)	653	653	729	790	718	708
	(2.7)	(0.1)	(11.6)	(16.4)	(- 9.1)	(- 1.5)
製造業	309	354	346	361	318	389
	(14.9)	(14.4)	(- 2.2)	(0.6)	(-12.2)	(22.6)
非製造業	458	372	503	462	577	309
	(1.1)	(-18.7)	(35.3)	(- 2.0)	(25.0)	(-46.5)
同(除海運)	344	308	386	434	398	334
	(- 7.2)	(-10.4)	(25.1)	(33.9)	(- 8.4)	(-16.1)

(注) 企画庁調べ。

カッコ内は前期(月)比増減率(%)。

◇商品市況は大勢強含み

10月から11月前半にかけての商品市況をみると、石油、鉛が軟化したものの、セメント、基礎薬品類、銅、紙などは引き続き堅調に推移し、また鉄鋼も、条鋼類の小反発に続いて鋼板類が目先き強保合いとなり、繊維も総じて下げ止まりないし小反発に転ずるなど、大勢強含み基調で推移した。

このように、8月末来の鉄鋼、繊維の高値訂正安商状がほぼ一巡したこともあって、商況の基調には全体として再び力強さが加わってきたようにかがわれるが、これは季節的な要因も加わり、需要が根強い拡大を続けていることがさきえとなっている。もっとも、こうした需要の伸びに対しメーカーの生産態度もかなり積極化しつつあるため、需要増大に対する供給の弾力性は総じて高まる方向にあり、このような需給地合いから、思惑人気の働く余地はかなり乏しく、派手な値動きを示す商品も見受けられなくなっている。先行きについても、こじばらくはこうした状況に格別の変化は予想されないため、市況はおおむね強含み程度で推移するものと思われる。

次に、商品別の動きをやや詳しくみると、鉄鋼では、条鋼類が10月下旬に小反発を示し、続いて更月後は鋼板類も下げ一服から目先き強保合いと

なった。これは、生産が急テンポで拡大を続けているにもかかわらず、他方、需要も国内向けを中心に着実な伸びを続けていることから、需給地合いはさしたる引きゆるみを見せず、このため、ひところ先安懸念から弱腰となっていた特約店筋が再び売り腰を強めつつあるためである。繊維でも、生糸を除きほぼ全品目にわたって下げ止まりないし小反発を示した。市中における玉整理の進捗などが好感され機屋筋の糸手当てがやや活発化したことがその背景となっている。このように総じて底入れ感が深まりつつあるとはいえ、新規の好材料に乏しいため、綿糸、羊毛糸は11月央にはいくぶん伸び悩んだ。非鉄では、各品目とも需給は小締まりぎみながら、相場は海外相場の動きを映じて銅が小幅続伸、鉛が軟化と区々の動きを示した。次に、石油は、生産調整撤廃による需給の引きゆるみから、需要期接近にもかかわらず、灯油、重油などを中心に軟化した。

一方、化学では、基礎薬品類、合成樹脂とも、生産水準の上昇にもかかわらず、需給は一段と引き

締まって値上がりを示す品目が目立ち、セメントも、逐月生産記録を更新しながらも、需要の増大を背景に依然シリ高歩調を続けた。紙も、需要期にあるうえ、懸案の外装ライナーの不況カルテル再延長が認可されたことなどもあり、洋紙、板紙とも堅調に推移した。なお、砂糖は、不況カルテルの再開により市中玉が若干減少したことなどから久方ぶりに小戻した。

(卸売物価——再びかなりの上昇)

10月の本行卸売物価は、前月比+0.6%(指数は107.0と従来の最高)と、再びかなり上昇した。これは、鉄鋼、繊維、石油など主要市況商品が下落したものの、非鉄が銅系(銅鉱、銅地金、伸銅品など)を中心に大幅に反騰したのをはじめ、食料(牛肉、冷凍まぐろ)、木材、窯業などが続騰したためである。11月上旬も、非鉄、木材の続騰に加え、鉄鋼、繊維(綿が中心)も小反発したため、前旬比+0.2%と引き続き上昇した。

(消費者物価——小幅続伸)

10月の消費者物価(東京)は、前月比+0.1%(季

卸 売 物 価 指 数 の 推 移

(単位・%)

	ウ エ イ ト	下 降 期 (ピーク 38/11) 38/11 → 40/7		上 昇 期 (ボトム 40/7) 40/7 → 41/10		最 近 の 推 移					
		8 月	9 月	10 月	10 月			11 月 上 旬			
					上 旬	中 旬	下 旬				
総 平 均	100.0	- 0.7	+ 5.4	+ 0.2	- 0.1	+ 0.6	+ 0.4	- 0.1	+ 0.2	+ 0.2	
食 料 品	16.4	- 0.4	+ 5.6	+ 0.5	+ 0.6	+ 0.4	+ 0.1	- 0.2	+ 0.2	- 0.1	
繊 維 品	12.9	- 8.0	+ 6.7	+ 1.5	+ 0.4	- 0.2	保 合	- 0.5	+ 0.3	+ 0.7	
鉄 鋼	10.2	- 3.4	+ 4.4	+ 3.1	- 0.5	- 0.8	- 0.3	- 0.1	- 0.1	+ 0.1	
非 鉄 金 属	4.5	+ 18.4	+ 24.4	- 10.1	- 7.1	+ 7.2	+ 4.2	+ 0.1	+ 2.1	+ 0.8	
金 属 製 品	3.5	+ 4.1	+ 3.9	+ 0.1	+ 0.6	+ 1.1	+ 1.1	保 合	- 0.1	保 合	
機 械 器 具	20.2	- 0.6	+ 0.8	+ 0.2	保 合	- 0.2	- 0.1	保 合	- 0.1	- 0.1	
石 油 ・ 石 炭	5.2	+ 1.0	- 2.0	- 0.1	+ 0.1	- 0.2	- 0.1	保 合	- 0.2	- 0.1	
木 材 ・ 同 製 品	6.1	- 2.7	+ 20.5	+ 2.2	+ 3.0	+ 2.4	+ 1.5	+ 0.1	+ 0.7	+ 0.3	
窯 業 製 品	3.0	- 0.8	+ 3.6	保 合	+ 0.2	+ 0.9	+ 0.5	+ 0.1	+ 0.3	保 合	
化 学 品	7.4	+ 1.9	- 2.2	+ 0.4	- 0.1	+ 0.1	+ 0.1	- 0.1	+ 0.1	保 合	
紙 ・ パ ル プ	3.3	- 0.3	+ 3.4	+ 0.4	+ 0.2	+ 0.2	+ 0.2	保 合	- 0.1	保 合	
雑 品 目	7.5	+ 1.1	+ 2.7	+ 0.2	- 0.6	- 0.6	- 0.3	- 0.1	保 合	保 合	
工 業 製 品	79.5	- 1.4	+ 4.2	+ 0.2	- 0.2	+ 0.3	+ 0.2	保 合	+ 0.2	+ 0.1	
非 工 業 製 品	20.5	+ 1.5	+ 9.8	+ 0.1	+ 0.5	+ 1.3	+ 0.8	- 0.4	+ 0.2	+ 0.4	
非鉄・食料を除く 総 平 均	79.1	- 1.7	+ 4.1	+ 1.0	+ 0.3	+ 0.1	+ 0.2	- 0.1	+ 0.1	+ 0.2	

節商品を除いてみても +0.1%)と小幅ながら続騰した。これは前月急騰した衣料が小反落したものの、食料(野菜、加工食品)、自由料金(理髪料、宿泊料)や、需要期入りの光熱(れん炭、木炭)などが値上がりしたことが響いている。なお、10月の本行小売物価(東京)は、前月比 +1.2%(生鮮食品を除くと +0.2%)と大幅に続騰した。

(輸出入物価——輸出物価上伸、輸入物価保合い)

10月の輸出物価は、木材(合板)、化学(肝油)が続落したものの、食料(冷凍まぐろ、まぐろかん詰)、金属(鉄鋼、非鉄)などが続騰したため、前月比 +0.2%と再び上昇した。一方、輸入物価は

消費者・小売・輸出入物価の推移

(単位・%)

	ウエイト	前年度比 上昇率		最近の推移			最近の 月前 年同 月比	
		39年 度平均	40年 度平均	8月	9月	10月		
消費者物価 (東京)	総合	100.0	+ 4.7	+6.8	-0.8	+0.7	+0.1	+ 4.0
	(季節商品を除く)	91.2	+ 4.6	+6.2	-0.1	+0.7	+0.1	+ 5.3
	被服	12.7	+ 2.1	+3.8	-1.0	+3.7	-0.2	+ 3.2
	光熱	5.2	- 0.1	+0.4	-0.1	保合	+0.2	+ 0.9
	住居	8.8	+ 4.1	+4.4	+0.4	+0.5	+0.2	+ 5.6
	雑費	30.3	+ 6.5	+7.5	-0.1	保合	保合	+ 8.0
	食料	43.1	+ 4.8	+8.1	-1.4	+0.6	+0.1	+ 1.3
	家賃地代	2.4	+ 9.0	+8.5	+0.8	+0.9	-0.1	+13.7
	公共料金	19.0	+ 3.8	+6.7	保合	保合	保合	+ 8.5
	自由料金 その他の商品	8.4	+11.0	+9.0	+0.2	+0.1	+0.2	+ 7.3
27.1	+ 2.0	+3.1	-0.7	+1.9	-0.1	+ 2.9		
消費者物価(全都市)	総合	100.0	+ 4.8	+7.4	-0.6	+1.1		+ 4.2
(季節商品を除く)	91.1	+ 4.5	+7.0	-0.1	+0.9		+ 5.6	
本行小売(東京)	総平均	100.0	+ 2.6	+4.6	-0.1	+1.4	+1.2	+ 3.1
(生鮮食品を除く)	93.3	+ 1.9	+4.4	+0.3	+1.6	+0.2	+ 2.7	
本行輸出入	輸出		+ 0.8	-0.7	+0.8	保合	+0.2	+ 1.5
輸入		- 0.8	-1.0	-1.2	-1.3	保合	+ 0.7	
交易条件		+ 1.5	+0.3	+2.0	+1.3	+0.2	+ 0.8	

(注) 特殊類別消費者物価指数は、総理府消費者物価指数をもとに、本行統計局が算出したもの。
特殊類別指数各額と総理府指数各目との関係は次のとおり。
1. 「食料」は両者同一。
2. 「家賃地代」は住居費中の家賃地代と同一。
3. 「公共料金」は、電気、ガス、水道、診察、入浴、教育、新聞など光熱、住居、雑費中の該当品目。
4. 「自由料金」は、仕立て、洗たく、理髪、パーマ、映画など住居、被服、雑費中の該当品目。
5. 「その他の商品」は被服、光熱、住居、雑費中の該当品目。

前2ヵ月かなりの下落を続けたあと、当月は保合いとなった。食料(アメリカ大豆、とうもろこしなど)、繊維(原毛、原綿)などが引き続き値下がりしたが、反面、金属(非鉄)、鉱物(銅鉱)が大幅に反騰したほか、木材(ひのき丸太)も続騰して上記商品の下落分を相殺したためである。この結果、交易条件指数は、前月比 +0.2%と引き続き好転した。

◇総合収支大幅に悪化

10月の国際収支は、資本収支が長期資本、短期資本ともに大幅の逆調となったうえ、輸入の急増を主因に貿易収支戻の黒字幅が前月を20百万ドル下回ったため、総合ではわずか1百万ドルの黒字にとどまり、収支はほぼ見合うかたちとなった(前月黒字、84百万ドル、前年同月、同93百万ドル)。まず貿易収支をみると、輸出は季節的な増加もあって前月を30百万ドル方上回ったものの、他方輸入もこれを上回る増加を示したため、差し引き黒字幅は217百万ドルと前月を20百万ドル下回った。季節調整後でも、黒字幅は154百万ドルと従来の水準をかなり下回った(4~6月平均189

国際収支

(単位・百万ドル)

	41年						前年 同月
	1~3月	4~6月	7~9月	8月	9月	10月	
經常収支	28	64	159	122	167	137	136
貿易収支	123	149	231	193	237	217	216
輸出	690	769	832	806	837	870	727
輸入	567	620	601	613	600	653	511
貿易外収支	△ 83	△ 76	△ 64	△ 65	△ 60	△ 70	△ 68
移転収支	△ 12	△ 9	△ 8	△ 6	△ 10	△ 10	△ 12
長期資本収支	△ 52	△ 43	△ 65	△ 34	△ 112	△ 80	△ 46
短期資本収支(注1)	4	5	10	7	0	53	△ 13
誤差脱漏	18	2	7	△ 22	29	3	16
総合収支	△ 2	19	78	59	84	1	93
金融勘定(注2)	△ 2	19	78	59	84	1	93
外貨準備増減	1	△ 2	△ 20	9	△ 19	△ 25	29
その他	△ 3	20	98	50	103	26	64

(注) 各期月平均。

1. 金融勘定に属するものを除く。
2. 金融勘定の△印は「外貨準備増減」では資産の減、「その他」では資産の減または負債の増を示す。

百万ドル、7～9月平均194百万ドル)。次に資本収支は、長期資本が円借款や、延払い信用供与もあって引き続き80百万ドルの大幅流出超となったほか、短期資本もBCユーザンスの減少を主因に53百万ドルの大幅逆調となった。最後に金融勘定をみると、前月急増した輸出手形の買持ち分が資金化された反面、業者段階の円シフトを映じて外銀ユーザンスが引き続き減少したほか、海外短資の期明け反動減もあって、為替銀行の短期資産負債バランスは好転したが、他方、外貨準備は引き続き25百万ドルの減少となった。

10月の輸出は、前年同月を2割方上回ったが、これには前年の水準が米国の備蓄輸入の反動減から低かったことが大きく響いており、季節調整後の実勢では前月比-1.9%と伸び悩んでいる。これを3ヵ月移動平均(季節調整済み)でみても、7月-0.1%、8月+1.2%、9月-0.5%と総じて伸び悩み傾向を示している。通関統計によって品目別の動きをみると、10月は食料品が船積みのずれ込みもあり、前年を3割方上回ったほか、テレビ、ラジオ等電気機器や自動車、合繊などが概して好調を示したが、他方船舶は前年の水準を下回り、また鉄鋼も輸出意欲がいくぶん減退している事情もあってほぼ前年の水準まで落ち込んでいる。先行指標の輸出信用状の動きをみても、季節調整済みで2ヵ月にわたり大幅減少を続け(前月

比9月-4.5%、10月-5.5%)、10月は本年初ごろの水準にまで低下した。品目別にみると、水産食品、自動車などは順調な増加を示している反面、船舶、化学製品、綿織物などは前年を下回り、鉄鋼も伸び悩みを続けている。また地域別では、アジア向けが順調に伸びている反面、アメリカ向けはいくぶん伸び悩みぎみとなっている(米国向け輸出の前年比増加率8月+23%、9月+22%、10月+16%)。

10月の輸入は、前年同月を28%も上回り、季節調整済みでも前月比+3.3%と引き続きかなりの

輸出信用状の内訳

(単位・百万ドル)

	1~3月	4~6月	7~9月	8月	9月	10月
合計	634 (+13)	669 (+15)	683 (+14)	713 (+19)	665 (+13)	651 (+10)
食料	29 (+34)	25 (+12)	29 (-6)	28 (+1)	32 (+30)	30 (+27)
水産品	20 (+54)	16 (+7)	21 (-7)	21 (+14)	25 (+45)	22 (+28)
繊維製品	113 (+1)	117 (+1)	130 (+11)	148 (+18)	117 (+5)	120 (-1)
綿製品	26 (-7)	25 (-13)	29 (-4)	33 (+0)	25 (-1)	24 (-8)
化学製品	50 (+17)	51 (+25)	48 (+11)	47 (+7)	50 (+6)	44 (-7)
肥料	16 (-7)	16 (+66)	13 (+4)	11 (+2)	14 (-14)	9 (-42)
金属製品	143 (+8)	144 (+4)	143 (+3)	140 (+8)	140 (-7)	132 (-2)
鉄鋼	132 (+9)	134 (+5)	131 (+5)	129 (+10)	129 (-2)	122 (+4)
機械	169 (+28)	187 (+31)	193 (+31)	206 (+38)	193 (+34)	192 (+28)
船舶	10 (+4)	9 (+74)	10 (+41)	8 (+11)	15 (+63)	6 (-9)
自動車	44 (+43)	46 (+5)	36 (+16)	38 (+39)	35 (+16)	35 (+14)
その他	130 (+8)	146 (+18)	139 (+16)	143 (+16)	133 (+20)	134 (+16)
北米	278 (+30)	295 (+22)	283 (+20)	288 (+22)	275 (+21)	277 (+18)
アジア	170 (-2)	182 (+9)	208 (+22)	225 (+28)	199 (+14)	188 (+11)
ヨーロッパ	81 (+12)	73 (+12)	69 (-9)	69 (-1)	70 (-7)	62 (-12)
その他	105 (+4)	119 (+8)	122 (+6)	131 (+11)	121 (+7)	124 (+6)

輸出入指標(季節調整済み)の推移

(単位・百万ドル)

	国際収支			通関		信用状		輸出	輸入
	輸出	輸入	貿易収	輸出	輸入	輸出	輸入	認証	承認
40年									
10~12月	684	544	140	693	693	598	311	710	661
41年									
1~3月	773	558	215	788	741	643	328	800	687
4~6月	787	598	189	790	763	673	342	846	673
7~9月	814	620	194	829	806	678	361	858	787
41年									
6月	800	594	206	802	755	678	323	846	707
7月	827	585	242	851	770	660	335	860	723
8月	786	634	152	792	817	703	363	854	775
9月	831	640	191	844	831	671	386	860	862
10月	815	661	154	819	850	634	361	833	831

(注) 季節調整はセンサス局法による。各期月平均。

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%)。各期月平均。

輸入承認品目別内訳

(単位・百万ドル)

	1~3月	4~6月	7~9月	8月	9月	10月
食料品	129 (+ 9)	143 (+ 15)	136 (+ 17)	138 (+ 41)	158 (+ 26)	145 (+ 41)
原燃料	401 (+ 22)	400 (+ 14)	428 (+ 24)	413 (+ 24)	450 (+ 27)	424 (+ 25)
羊毛	34 (+ 22)	36 (+ 30)	33 (+ 27)	31 (+ 22)	34 (+ 36)	29 (- 11)
綿花	38 (- 3)	27 (- 13)	32 (+ 19)	27 (+ 17)	37 (+ 14)	29 (- 10)
鉄鉱石	36 (+ 30)	37 (+ 9)	42 (+ 16)	45 (+ 35)	47 (+ 19)	39 (+ 47)
鉄鋼 くず	8 (- 28)	10 (- 26)	14 (+ 15)	15 (+ 16)	16 (+ 24)	25 (+247)
木材	40 (+ 36)	52 (+ 37)	55 (+ 39)	53 (+ 27)	59 (+ 56)	51 (+ 25)
石炭	19 (+ 25)	18 (+ 5)	21 (+ 12)	15 (± 0)	22 (+ 28)	19 (- 4)
石油	99 (+ 21)	83 (+ 3)	92 (+ 12)	89 (+ 8)	98 (+ 14)	96 (+ 18)
化学製品	40 (+ 14)	42 (+ 2)	43 (+ 16)	43 (+ 15)	43 (+ 18)	47 (+ 35)
機械	45 (- 6)	57 (- 25)	59 (+ 20)	58 (- 7)	60 (+ 59)	57 (+ 37)
鉄鋼	8 (- 27)	10 (- 27)	16 (+ 52)	13 (+ 26)	19 (+ 140)	18 (+112)
その他	50 (+ 22)	65 (+ 19)	61 (+ 13)	59 (- 10)	60 (+ 35)	72 (+ 62)
合計	674 (+ 16)	717 (+ 8)	743 (+ 21)	725 (+ 19)	791 (+ 31)	764 (+ 34)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%). 各期月平均。

増加を示した。10月の水準は輸入が比較的落ち着いていた本年6~7月ごろに比べ1割方上回っている。こうした輸入の大幅増加については、もとより生産の根強い拡大がその基本的な背景をなしていることはいうまでもないが、このところかなり低水準となっている輸入原材料在庫(在庫率7月72.4%、9月68.0%)を補充しようとする動きが多少とも輸入の増勢を拍車している面も否めない。通関統計によって品目別の動きをみると、ここ数か月来急増を続けてきた小麦、とうもろこし、木材などはやや一服ぎみとなっているが、その他の品目は引き続き根強い増勢をみせており、特に綿花、鉄鉱石、鉄鋼くずなどの増加が目立っている。先行指標は輸入承認、輸入信用状とも前月急増の反動もあって前月を下回った(季節調整済み)ものの、依然高水準を続けている。輸入承認によって品目別の動きをみると、くず鉄、銑鉄、非鉄金属、石油など原燃料の著増が目立っており、輸入関連産業の生産が上昇を続け、在庫率もさほど高くない点などを合わせて考えると、今後も当面は高水準の輸入が続くものと見込まれる。